



筑紫女学園大学リポジト

Definition of pratyabhijñā in Jaina literatures

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川尻, 洋平, KAWAJIRI, Yohei メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/390

ジャイナ教における再認識の定義

川 尻 洋 平

Definition of *pratyabhijñā* in Jaina literatures

Yohei KAWAJIRI

0. はじめに

ジャイナ教の認識論において、「再認識」(pratyabhijñā/pratyabhijñāna)が独立したプラマーナ(正しい認識手段)として、間接知(parokṣa)に含められることはよく知られている。間接知は五種類あり、再認識の他に「想起」(smṛti)「タルカ」(tarka)「推理」(anumāna)「聖典」(āgama)が挙げられる。ジャイナ教論理学時代の学匠アカランカ(Akalaṅka、空衣派、ca. 720-780)は、ジャイナ教聖典期の学匠ウマースヴァーティ(Umāsvāti、5世紀頃)が述べた abhinibodhika の同義語としての五知、すなわち mati, smṛti, saṃjñā, cintā, abhinibodhika のうち¹⁾、mati をそのまま感官的直接知とし、smṛti をそのまま想起とし、saṃjñā を再認識とし、cintā をタルカとし、abhinibodhika を推理とすることによって、伝統的な五知説をプラマーナ論の枠組みで再構築しようと試みた。アカランカのこのような試みは後の学匠ヴィドゥヤーナンディン(Vidyānandin、空衣派、9世紀)、プラバーチャンドラ(Prabhācandra、空衣派、10-11世紀)、デーヴァスーリ(Devasūri、白衣派、11-12世紀)、ヤショーヴィジャヤ(Yaśovijaya、白衣派、17世紀)らによって受継がれる。

ジャイナ教の伝統において、初期には「これはあれに他ならない」という想起が再認識と見なされていた。プージュヤパーダ(Pūjyapāda、空衣派、7世紀頃)は、*Sarvārthasiddhi* において次のように定義している。

SAS p.255: tad eva idam iti smaraṇam pratyabhijñānam /

「『これはあれに他ならない』という想起が再認識である」

一般的に、「これはあれに他ならない」という形の知は再認識と考えられるが、ここでは想起と再認識は区別されていない。一方で後代のジャイナ教の綱要書 *Jainatarkabhāṣā* において、ヤ

ショーヴィジャヤは再認識を次のように定義している。

JTBh p.9,11-14: anubhavasmr̥tīhetukaṃ tiryagūrdhvatāsāmānyādigocaraṃ saṅkalanātmakaṃ jñānam pratyabhijñānam / yathā ‘tajjātiya evāyaṃ gopiṇḍaḥ’ ‘gosadr̥śo gavayaḥ’ ‘sa evāyaṃ jinadattaḥ’ ‘sa evānenārthaḥ kathyate’ ‘govilakṣaṇo mahiṣaḥ’ ‘idaṃ tasmād dūram’ ‘idaṃ tasmāt samīpam’ ‘idaṃ tasmāt prāṃśu hrasvaṃ vā’ ityādi /

「直接経験と想起を原因とし、空間的共通性と時間的共通性 (tiryagūrdhvatāsāmānya) などを対象とし、混交 (saṅkalana) を本質とする知が再認識である。例えば、『この個物たる牛はあの類のものに他ならない』『ガヴァヤは牛に似ている』『これはあのジナダッタに他ならない』『まさにあの対象がこの [語] によって表示される』『水牛は牛と異なる』『ここはそこから離れている』『ここはそこから近い』『これはあれより長い、あるいは短い』などというように」

この定義によれば、再認識の原因は直接経験と想起である。そして対象は、空間的共通性と時間的共通性である。宇野 [1985] によれば、空間的共通性とは、同時に認められる同類の個物に共通する性質、例えば、黒犬や茶犬などに共通する犬性をさし、異時的共通性とは、時間的に変異するコップ、水差し、人形などに共通して遍満する「地」などの実体を指す²⁾。さらに「など」という語によっては、「類似性」(sādr̥śya)「相異性」(vailakṣaṇya)「遠距離性」(dūratva)「近接性」(samīpatva)などが意図されている³⁾。混交を本質とする知とは、認識論的な側面からは「これ」という形で直接経験、「あれ」という形で想起が現れている知である。しかし、ここで興味深いのは、既に指摘されているように⁴⁾、ジャイナ教の認識論において、独立したブラマーナとしての再認識がニヤーヤ学派に説かれている類比 (upamāna) をも含んでいるという点である。

上述の例から明らかなように、ジャイナ教では「これはあのデーヴァダッタに他ならない」という同一性の再認識の他に、「ガヴァヤは牛に似ている」という類似性の再認識、「水牛は牛とは異なる」という相異性の再認識、そして「ここはそこから離れている」という相対性の再認識が言及される。これらの再認識については、これまで宇野 [1985] や藤永 [1990] によって言及されている。しかしながら、これまでの研究で言及されていない再認識の例に「これは木である」という形の知がある。この例はアカランカが *Laghiyastraya* の自注 (vivṛtti) やそれに対する注釈文献などに見られる。

本稿では、プージュヤパーダからヤショーヴィジャヤに至るまでジャイナ教文献に見られる再認識の定義を蒐集し、その歴史の変遷を示すとともに、再認識の例として挙げられる「これは木である」という知がなぜ再認識と見なされるのかを明らかにすることを目的とする。

1. ジャイナ教における再認識の定義の歴史の変遷

まずジャイナ教の歴史において、再認識がどのように定義されているのかを網羅的に蒐集し、以下にその変遷を示す。

Sarvārthasiddhi (Pūjyapāda、空衣派、6世紀)

SAS p. 225, 3-4: tad eva idam iti smaraṇam pratyabhijñānam /
「『これはあれに他ならない』という想起が再認識である」

Āptamīmāṃsāvṛtti (Vasunandin、空衣派、年代不詳、アカランカ以前)

ĀMV p. 23, 35: pratyabhijñā sa evāyam iti jñānam /
「再認識は『これはあれに他ならない』という知である」

ĀMV p.29, 20-21: vastunaḥ pūrvāparakālavṛtyāptijñānam pratyabhijñānam / yathā sa evāyam devadatta ityādi /
「事物について前後の時間を遍充する知が再認識である。例えば、『これはあのデーヴァダッタに他ならない』などというように」

Siddhiviniścaya (Akalaṅka、空衣派、8世紀)

SVin p.106: tad evedam tatsadṛśam iti vā pratyabhijñā /
「『これはあれに他ならない』あるいは『[これは] あれに類似している』という [知] が再認識である。」

Pramāṇaḥarīkṣā (Vidyānandin、空衣派、9世紀)

PPar p. 69, 30: tad evedam ityākāraṃ jñānaṃ saṃjñā pratyabhijñā, tādṛśam evedam ityākāraṃ vā vijñānaṃ saṃjñocyate /
「『これはあれに他ならない』という形の知が、saṃjñāすなわち再認識である。あるいは『これはあれに似ているものに他ならない』という形の知が saṃjñā [すなわち再認識] である、と言われる」

Parīkṣāmukha (Māṅikyanandin、空衣派、10世紀)

PMu 3.5-10: darśanasmarāṇakāraṇakam saṅkalanam pratyabhijñānam tad evedam tatsadṛśam tadvilakṣaṇam tatpratiyogityādi //5// yathā sa evāyam devadattaḥ //6// gosadṛśo gavayaḥ //7// govilakṣaṇo mahiṣaḥ //8// idam asmād dūram //9// vṛkṣo 'yam ityādi //10//
「知覚と想起を原因とし、混交したものが再認識である。『これはあれに他ならない』『[これは] あれに似ている』『[これは] あれと異なる』『[これは] あれと相対的である』などである。例えば、『これはあのデーヴァダッタに他ならない』『ガヴァヤは牛に似ている』『水牛は牛と異なる』『ここはそこから離れている』『これは木である』などのように」

Nyāyakumudacandra (Prabhācandra、空衣派、10-11世紀)

NKC p. 411: sa evāyam tena sadṛśo 'yam iti vā ekatvasādṛśyābhyāṃ padārthānām saṅkalanam

pratyavamarśaḥ / ... pūrvaṃjñātasya punaḥ kālāntare sa evāyam iti jñānaṃ pratyabhijñānam /
『これはあれに他ならない』あるいは『これはあれと似ている』というように、事物の同一性と類似性に基づく混交したものが再把握 (pratyavamarśa) である。過去に経験したものについて再び別の時に起こる『これはあれに他ならない』という知が再認識である」

Prameyakamalamārtanḍa (Prabhācandra)

PKM p. 338: darśanasmarāṇe kāraṇaṃ yasya tat tathoktam / saṅkalanam
vivakṣitadharmayuktatvena pratyavamarśanaṃ pratyabhijñānam /
『知覚と想起を原因とするそれ [再認識] がそのように [darśanasmarāṇakāraṇakam と] 表現される。混交したもの、すなわち意図された属性を具えたものとして再把握することが、再認識である』

Pramāṇanayatattvāloka (Devasūri、白衣派、11-12世紀)

PNT 3.5: anubhavasmr̥tihatukam̐ tiryagūrdhvatāsāmānyādigocaram̐ saṅkarātmakam̐ jñānaṃ
pratyabhijñānam //
『直接経験と想起を原因とし、空間的共通性と時間的共通性などを対象とし、混交を本質とする知が再認識である』

Pramāṇamīmāṃsā (Hemacandra、白衣派、11-12世紀)

PMi 1.2.4: darśanasmarāṇasambhavaṃ tad evedaṃ tatsadṛśaṃ tadvilakṣaṇaṃ tatpratiyogityādi
saṅkalanam̐ pratyabhijñānam /
『知覚と想起に基づいて生じる『これはあれに他ならない』『[これは] あれに似ている』『[これは] あれと異なる』『[これは] あれと相対的である』などという混交したものが、再認識である』

Laghyastrayavṛtti (Abhayacandra、空衣派、12-13世紀)

LTV p. 29: pratyakṣasmr̥tihatukam̐ saṅkalanam̐ anusandhānaṃ pratyabhijñānam saṃjñā /
yathā sa evāyaṃ devadattaḥ, gosadr̥śo gavayaḥ, govilakṣaṇo mahiṣaḥ, idam̐ asmād alpam̐,
idam̐ mahat, idam̐ asmād dūram̐, idam̐ asmāt prāṃśu, vṛkṣo 'yam̐ ityādi pūrvottarakāravāpino
dravyasya tadviśayasya darśanasmarāṇābhyām̐ agr̥hitatvāt /
『直接知覚と想起を原因とし、混交したものであり、統合するものが、再認識すなわち saṃjñā である。例えば、『これはあのデーヴァダッタである』『ガヴァヤは牛に似ている』『水牛は牛と異なる』『これはあれより小さい』『これは [あれより] 大きい』『ここはそこから離れている』『これはあれより長い』『これは木である』などというように。前後の姿を遍充する実体は、まさにその [再認識の] 対象であるから、知覚と想起によって把握さ

れないからである」

Tarkarahasyadīpikā (Guṇaratna、白衣派、13-14世紀)

TRD ad ṢDS p. 323, 2-4: anubhavasmarāṇakāraṇakam saṅkalanam pratyabhijñānam / tad evedam tatsadrśam tadvilakṣaṇam tatpratiyogityādi / yathā sa evāyam devadattaḥ gosadrśo gavayaḥ govilakṣaṇo mahiṣaḥ idam asmād dirgham hrasvam aṇiyo mahiyo daviyo vā dūrād ayam tivro vahniḥ surabhidaṃ candanam ityādi /

「直接経験と想起を原因とし混交したものが、再認識である。『これはあれに他ならない』、『これは] あれに似ている』、『これは] あれと異なる』、『これは] あれと相対的である』などというように。例えば、『これはあのデーヴァダッタである』、『ガヴァヤは牛に似ている』、『水牛は牛と異なる』、『これはあれより長い、短い、より小さい、より大きい、あるいはより離れている』、『遠くはなれていても、この火は熱い』、『この白檀は芳香をもつ』などである」

Nyāyadīpikā (Dharmabhūṣaṇa、空衣派、15-16世紀)

ND p. 56, 2-3: anubhavasmr̥tīhetukam saṅkalanātmakam jñānam pratyabhijñānam / 「直接経験と想起を原因とし、混交を本質とする知が再認識である」

Jainatarkabhāṣā (Yaśovijaya、白衣派、17世紀)

JTBh p. 9, 11-14: anubhavasmr̥tīhetukam tiryagūrdhvatāsāmānyādigocaram saṅkalanātmakam jñānam pratyabhijñānam /

「直接経験と想起を原因とし、空間的共通性と時間的共通性 (tiryagūrdhvatāsāmānya) などを対象とし、混交 (saṅkalana) を本質とする知が再認識である」

まずこの一連の資料を見る限り、「これはあれに似ている」という類比をも再認識に含めるのはアカランカにまで遡ることが確認できる。

再認識が直接経験と想起を原因とするものであることを明確に述べているのは、マーニキャンナンディン以降である。藤永 [1990] によれば、ブージュヤパーダは再認識の原因を想起ではなく、実在物が持つ存在性である、と言う。マーニキャンナンディンはさらに再認識のもつ混交 (saṅkala) という特徴に言及し、再認識の例として「これは木である」という知を挙げている。

上述のようにアカランカは、再認識を意味する術語として saṃjñāを用いているが、これを定義中に適用しているのはヴィドゥヤーナンディンである。

プラバーチャンドラの定義の特徴は、再認識を再把握 (pratyavamarśa) という語によって定義づけている点にある。再把握は、アカランカが再認識を意味する術語として用いた語の一つである⁵⁾。さらにプラバーチャンドラは、「混交」(saṅkalana) を存在論的な側面から分析し、現に経験しているものに関して同一性や類似性などの属性を具えたものとして再把握することと述べている。

つまり、現に経験されている X と想起される Y との間の同一性や類似性などとの関係を有するものとして、現に経験されている X を捉えることである。したがって、ここで意図されている混交とは、直接経験と想起の混交ではなく、むしろ現に経験されている X と、現に経験されている X にある想起される Y との関係の混交である。このことは、宇野 [1985: 246] において、*Prameyaratnamālā* の刊本のノート（著者不詳）に基づいて説明されている。*Prameyaratnamālā* の刊本のノートに述べられている内容の原型は、プラバーチャンドラの再認識の定義中、および *Pramāṇanayatattvāloka* に対する注釈 *Ratnākarāvatārikā* にも見いだすことができる⁶⁾。

デーヴァスーリに至って、再認識の対象について、同一性と類似性から空間的共通性と時間的共通性への移行がみられる。

2. 再認識の一例「これは木である」(vṛkṣo 'yam)

次に「これは木である」という知がなぜ再認識とみなされうるのか、そしてどのように分析されるのか、以下に検討する。この例が初めて用いられるのは、管見によれば、アカランカの *Laghiyastraya* に対する自注 (vivṛtti) においてである。そしてこの例はプラバーチャンドラの *Nyāyakumudacandra* において説明が与えられている。まず「これは木である」という知についてアカランカがどのように述べているのかを見てみよう。アカランカは *Laghiyastraya* 1.19 に対する自注において次のように述べている⁷⁾。

Vivṛtti on LT1.19: pratyakṣe 'rthe saṃjñāsaṃjñīsambandhapratipatteḥ pramāṇāntaratve vṛkṣo 'yam iti jñānaṃ vṛkṣadarśinaḥ pramāṇāntaram, gavayo 'yam iti yathā gavayadarśinaḥ prasiddhārthasādharmyāt sādhyasiddher abhāvāt /

「直接知覚される対象に関して、名称関係に関する [『これはガヴァヤである』という] 理解が別のプラマーナである [と認められる] ならば、『これは木である』という知は木を見ているものにとって別のプラマーナである。『これはガヴァヤである』という [知] はガヴァヤを見ているものにとって [類比という別のプラマーナである] ように [、目下の『これは木である』という知も別のプラマーナである]。既知の対象との類似性に基づく未知の [対象の] 確立がないからである」

ここでアカランカ自身は「これは木である」という知が再認識であるとまでは明言していない。アカランカによれば、ニヤーヤ学派において、名称関係に関する「これはガヴァヤである」という知を類比という独立したプラマーナとして認めるならば⁸⁾、「これは木である」という知も独立したプラマーナであり、しかも類比とは別のプラマーナとして認められるべきである⁹⁾。なぜなら、類比が既知の対象との類似性に基づいているのとは異なり、「これは木である」という知は既知の対象との類似性には基づいていないからである。類比知が起こる過程は次のように説明される。

TS58: upamitikaraṇam upamānam / saṃjñāsaṃjñīsambandhajñānam upamitiḥ / tatkarāṇam sādṛśyajñānam / atideśavākyaṛthasmarāṇam avāntaravyāpāraḥ / tathā hi kaścīd

gavayaśabdārtham ajānan kutaścid āraṇyakapuruṣād gosadr̥ṣo gavaya iti śrutvā vanaṃ gato
vākyaārtham smaran gosadr̥ṣaṃ piṇḍaṃ paśyati / tadanantaram asau gavayaśabdavācya ity
upamitir utpadyate //

「類比とは類比知の手段である。類比知とは名称と名称付けられるものとの関係の認識である。その [類比知の] 手段は類似性の認識である。類似性を示す文意の想起が、媒介的機能 (avāntaravyāpāra) である。すなわち、ある人がガヴァヤという語の意味を知らないとき、ある森の住人から『ガヴァヤは牛に似ている』と聞いた後で、森に行き、文の意味を思い出して、牛に似ている個物を見る。その直後に、『これは『ガヴァヤ』という語の表示対象である』という類比知が生じる」¹⁰⁾

「これは『ガヴァヤ』という語の表示対象である」あるいは「これはガヴァヤである」という類比知の原因として考えられる認識に三種類ある。第一に、「ガヴァヤは牛に似ている」という形で森の住人から得られる認識である。第二に、眼前の牛に似ている個物にある牛との類似性の認識である。この第二の認識は、ニヤーヤ学派が定義する類比という認識手段である。そして第三に、類似性の認識と類比知に介在するものとして、過去に聞いた「ガヴァヤは牛に似ている」という文の意味の想起である¹¹⁾。このような三種類の認識を原因として起こる類比知は、ニヤーヤ学派によれば、「これは『ガヴァヤ』という語の表示対象である」という形で起こる名称と名称付けられるものとの関係の認識に他ならない。

このようにニヤーヤ学派の類比が分析されるとき、ジャイナ教において類比は再認識に含められる。このことをプラバーチャンドラは次のように述べる。

PKM p. 347, 1-5: yathaiva hy ekadā ghaṭam upalabdhavataḥ punas tasyaiva darśane sa
evāyaṃ ghaṭaḥ iti pratipattiḥ pratyabhijñā, tathā gosadr̥ṣo gavayaḥ iti saṅketakāle
gosadr̥ṣagavayābhidhānāyor vācyavācakasambandhaṃ pratipadya punar gavayadarśanāt
tatpratipattiḥ pratyabhijñā kin neṣyate /

「実に、まさにちょうどある時に壺を知覚したものたちに再び同じその [壺の] 知覚があるとき、『これはあの壺と同じである』という知が再認識であるように、『ガヴァヤは牛に似ている』という言語協約設定時に、牛の類似物とガヴァヤという名称の間の表示関係を理解して、再びガヴァヤを知覚するから、その [『これはガヴァヤである』という] 知は再認識であるとしてどうして認められないのか」

牛の類似物とガヴァヤという名称の間の表示関係を理解し、牛に似ているガヴァヤを知覚するとき、その表示関係の想起に基づいて「これはガヴァヤである」という知が起こる。このように、「これはガヴァヤである」あるいは「これはガヴァヤという語の表示対象である」という知は知覚に加えて、表示関係の想起という形で想起をも原因としている。したがって、プラバーチャンドラが再認識を知覚と想起を原因とするものとして定義しているように、定義上このような形の知も再認識とみなされるのである。

一方、「これは木である」という知が起こる過程について、プラバーチャンドラは *Laghiyastraya*

に対する注釈 *Nyāyakumudacandra* において次のように述べる。

NKC p. 501,11-14: *kathaṃ tajjñānam utpadyata iti cet / ucyate vṛkṣānabhijño yadā kaścit kañcit pṛcchati kidṛśo vṛkṣaḥ iti / sa taṃ praty āha śākhādīmān vṛkṣaḥ iti / tadvākyāc cāhitasamskāraḥ praṣṭā punaḥ śākhādīmantam padārthaṃ paśyan ayaṃ vṛkṣaḥ iti pratipadyate /*

「[反論] どのような仕方ですその知は生じるのか。

[答論] 答える。木を知らないあるひとがある人に『木とはどのようなものか』と尋ねる。そのひとがその [木をしらない] ひとに『木は枝などを持っている』と答える。そして、その文に基づいて潜在印象を植え付けられた質問者が、再び、枝などを有するものを見て、『これは木である』と認識する」

「これは木である」という知の場合も、原因として考えられる認識には三種類ある。第一に、「木は枝などを持っているもの」という形で木を知っている人から得られる認識である。第二に、眼前の枝を有する事物にある有枝性などの木にある共通性の認識である。そして第三に、眼前の事物に枝などがあることを認識した後に起こる「木は枝などを持っている」という文の意味の想起である。これらの認識を通じて「これは木である」という知が起こる。この「これは木である」という知も、知覚と想起を原因しているから、「これはガヴァヤである」という知と同様に再認識とみなされる。

ここで「これはガヴァヤである」「これは木である」という二つの例によって示される知は、名称と名称付けるものとの間の関係の想起を原因としている。両者の違いは既知の対象との類似性の認識があるか否かである。「これは木である」という知の場合には、類似性を認識しているのではなく、木と呼ばれるものの共通性を認識しているのである。

アカランカ以後、アカランカの著作に対する注釈文献以外で、「これは木である」という知を再認識の一例として挙げるジャイナ教の学匠にマーニキャンナンディンがいる。マーニキャンナンディンは、*Parikṣāmukha* において再認識の例を次のように挙げている。

PMu 3.6-10: *yathā sa evāyaṃ devadattaḥ //6// gosadrśo gavayaḥ //7// govilakṣaṇo mahiṣaḥ //8// idam asmād dūram //9// vṛkṣo 'yam ityādi //10//*

「例えば、『これはあのデーヴァダッタに他ならない』、『ガヴァヤは牛に似ている』、『水牛は牛と異なる』、『ここはそこから離れている』、『これは木である』などのように」

Parikṣāmukha に対して注釈 *Prameyakamalamārtanḍa* を著したプラバーチャンドラは次のように述べている。

PKM p. 347, 19-348, 2: *tathā vṛkṣādyanabhijño yadā kaścit kañcit pṛcchati kidṛśo vṛkṣādir iti / sa taṃ praty āha śākhādīmān vṛkṣa ekaśiṃño gaṇḍako 'ṣṭapādaḥ śarabhaḥ cārusatānviṭaḥ siṃhaḥ ityādi / tadvākyāhitasamskāraḥ praṣṭā yadā śākhādīmato 'rthān pratipadya ayaṃ sa vṛkṣaśabdavācyaḥ ityādirūpatayā tatsaṃjñāsamjñāsambandhaṃ pratipadyate tadā kiṃ nāma tatpramāṇaṃ syāt / upamānam / ity asaṃbhāvyam / sarvatroktaparakārapratipattau prasiddhārthasādharmyāsambhavāt / tataḥ pratiniyatapramāṇavyavasthām abhyupagaccatā*

pratipāditaparakārā pratitih̄ pratyabhijñāivety abhyupagantavyam /

「同じように、木などを知らないある人がある人に『木などはどのようなものか』と尋ねる。そのひとがその [木を知らない人] に [次のように] 答える。

『木は枝などを持つものである』、『サイ (ganḍa) は一つの角を持つものである』、『シャラバ (八本足をもつ想像上の動物) は八本足のものである』、『ライオンは美しいたてがみをそなえたものである』などというように。それらの文によって潜在印象を植え付けられた質問者が、枝などをもつ対象を理解して、『これはあの木という語の表示対象である』などの形でその名称と名称付けられるものの関係を理解する場合、一体そのプラマーナは何であろうか。

【反論者】 類比である。

【答論者】 そのようなことはありえない。あらゆるものが上述の仕方理解されるとき、既知の対象との類似性がありえないからである。それゆえ、特定のプラマーナの確定を是認するものによって、[『これはあれに似ている』、『これはあれと異なる』などの] 仕方が理解せしめられた知は再認識に他ならないと認められるべきである」

ここで述べられている「これは木である」という知が起こる過程については、上述の *Nyāyākumudacandra* においてプラバーチャンドラ自身が説明している内容と同じである。ここで注目されるべきは、プラバーチャンドラが明確に「これは木である」という知を再認識であると述べている点である¹²⁾。このような形の知が再認識とみなされるのは、「これ」という形で対象を直接知覚する一方で、眼前にある枝などを持つ対象を見て、「木は枝などを持つものである」という形で木と枝を持つもの間の表示関係を想起しているからである。「木である」という言明は、このような名称と名称付けられるものの関係の想起に基づいており、直接経験と想起を原因としているという点において、「これは木である」という認識も再認識に他ならないのである。

一方、*Parikṣāmukha* に対する注釈 *Prameyaratnamālā* を著したアナンタヴィールヤはこの例については説明を与えていない。しかし、*Prameyaratnamālā* の刊本のノートによれば、「これは木である」という知は、木の共通性の想起を本質とする再認識 (*vṛkṣasāmānyasmṛtirūpapratyabhijñānam*) である。すなわち、まず眼前に枝などを有する事物を知覚して、枝などを有するものであることなどの木の共通性を想起した後に、「これは木である」という形で再認識が起こるのである。また刊本のノートには「これは木である」という知が混交した知の例として挙げられている。それによれば、「名称付けられるもの、すなわち表示対象を知らしめる手段は、意図された名称対象にある属性との混交である。例えば『これは木である』というように」という形で述べられている¹³⁾。「これは木である」という知には、「これ」という直接経験が現れ、「あれ」という想起は直接的には現れていないが、混交をこのように存在論的な側面から分析することによって、「混交したもの」という *Parikṣāmukha* の定義を満たしていると考えられることができる。

3. 結語

アカランカが *saṃjñā* をジャイナ教特有の術語として「再認識」を意味する語としてではなく、一般的な語として「名称」をも意味することを意識して、名称関係の知に他ならない類比知をも再認識に含めた可能性が考えられる。名称関係の知は、過去に聞いた名称関係の知の想起に基づいているからである。「これは木である」という知も名称関係の知に他ならず、直接経験だけではなく想起をも原因としていることから、再認識に含められるのである。「これは木である」という知は、直接経験と想起という二つの認識が混合したものとしては現れていない。しかし、「混合」を存在論的な側面から、直接経験されている対象と、直接経験されている対象と想起される対象の関係の混合と捉えることによって、「これ」と「あれ」という二つの認識が現れていない知についても再認識とみなしうるのである。

アカランカとマーニキャンナンディン以後、「これは木である」という例は、両者の著作の注釈においてのみ言及され、以後この例が再認識の例に用いられることはない。ヤショーヴィジャヤに至って、「この [語] によってまさにあの対象が表示される」(sa evānenārthaḥ kathyate) という例が用いられているが、これら二つの例はともに表示関係を示す知であるという点で同じである。「これは木である」という例が名称関係をより明確な形で示す「この [語] によってまさにあの対象が表示される」という例によって言い換えられたと考えられる。

略号および参考文献

- ĀM *Āptamīmāṃsā* (Samantabhadra): Gajādhar Lāl Jain (ed.), *Āptamīmāṃsā Pramāṇaparīkṣā ca*. Sanātana Jaina Granthamālā 10-7, 8, Benares: Bhāratiya Jain Siddhānt Prakāśiṇi Saṃsthā, 1914.
- ĀMV *Āptamīmāṃsāvṛtti* (Vasunandin): See ĀM.
- JTBh *Jainatarkabhāṣā* (Yośovijaya Gaṇi): (a): Sukhlal Sanghavi, Mahendra Kumar and Dalsukh Malvania (eds.), Singhi Jain Series 8, Ahmedabad-Calcutta: Singhi Jain Granthamala, 1938. (b): Vijoyodaya Sūri (ed.), with Sanskrit Commentary Ratnaprabhā ṭikā, Ahmedabad: Jaśavantlāl Giradharlāl Śāh, 1951.
- LT *Laghyastraya* (Akalaṅka Deva): Pandit Mahendra Kumār Śāstrī (ed.), *Akalaṅkagranthatraya*, Singhi Jain Series No.12, Ahmedabad-Calcutta: Singhi Jaina Granthamālā, 1939.
- LTV *Laghyastrayavṛtti* (Abhayaçandra): Nathūrām Premi (ed.), *Laghyastryādisamgrahaḥ*, Māṇikacandra Digambara Jaina Granthamālā, no.1, Bombay: Māṇikacandra Digambara Jaina Granthamālā Samiti, Vik. Saṃ. 1972 (=1915).
- ND *Nyāyadīpikā* (Dharmabhūṣaṇa): Pt. Darabarilal Jain (ed.), Virsevāmandir Series 4, Sarsav: Virsevāmandir, 1945.
- NKC *Nyāyakumudacandra* (Prabhāçandra): Mahendra Kumār Śāstrī (ed.), *Nyāya-Kumuda-Candra of Śrīmat Prabhāçandrācārya Acommentary on Bhaṭṭākalāṅkadeva's Laghyastraya*, Vol. II., Sri Garib Dass Oriental Series No. 122, 2nd ed. Delhi: Sri Satguru Publications, 1991, 1st ed. Bombay in 1912.
- PKM *Prameyakamalamārtaṇḍa* (Prabhāçandra): See PMu(b).
- PMi *Pramāṇamīmāṃsā* (Hemaçandra): Sukhlālji Sanghavi and others (eds.), *Pramāṇa-mīmāṃsā of*

- Kalikāla Sarvajña śrī Hemacandrācārya*, Saraswati Oriental Series No.1, Ahmedabad: Saraswati Pustak Bhandar.
- PMu *Parikṣāmukhasūtra* (Māṇikyanandin): (a) S. C. Ghoshal (ed.), *Parikṣāmukham by Māṇikyanandi with Prameya-ratnāmālā by Anantavīrya*, The Sacred Books of the Jains Vol. II, 2nd ed. New York: AMS Press, 1974, 1st. ed. in 1940. (b) Pt. Mahendra Kumār Śāstrī (ed.), *Prameyakamalamārtanḍa by Shri Prabha Candra (A Commentary on Shri Manik Nandi's Pareeksha Mukh Sutra)*, with Introduction, Indexes etc., Sri Garib Dass Oriental Series No.94, 3rd ed., Delhi: Sri Satguru Publications, 1990, 1st. ed. in 1912. (c) Pandit Hira Lal Jain (ed.), *Prameyaratnamālā of Laghu Anantavīrya A Commentary on Pariṅśāmukha Sūtra of Māṇikyanandi*, with Chintamani Hindi Commentary and Ancient Sanskrit notes, the Vidyabhawan Sanskrit Granthamala 107, Varanasi: Chowkhambha Vidyabhawan, 1964.
- PNT *Pramāṇanayatattvāloka* (Devasūri): Motilal Lāghāji (ed.), *Pramāṇanayatattvāloka of Devasūri, with the auto commentary Syādvādaratnākara of Devasūri*, 5 vols. Poona, 1927-1931.
- PPar *Pramāṇaparikṣā* (Vidyānandin): See ĀM.
- PRM *Prameyaratnamālā* (Anantavīrya): See PMu(c).
- RA *Ratnākarāvātārikā* (Ratnaprabha): Pt. Dalsukh Malvania (ed.), *Ratnaprabhasūri's Ratnākarāvātārikā, Being a Commentary on Vādi Devasūri's Pramāṇanayatattvāloka with A Pañjikā by Rājaśekharasūri, A Ṭīpṇa by Pt. Jñānacandra and Gujarati Translation by Muni Shri Malayavijayaḥi*, vol. 2, Lalbhai Dalpatbhai Series No. 16, Ahmedabad: Lalbhai Dalpatbhai Bharatiya Sanskriti Vidyamandira, 1968.
- ṢDS *Ṣaḍdarśanasamucchaya* (Haribhadra Sūri): Mahendra Kumār Jain (ed.), *Ṣaḍdarśanasamucchaya of Haribhadrasūri [with the Commentary Tarkarahasyadīpikā of Guṇaratna Sūri and Laghuvṛtti of Somatilaka Sūri and an Avacūṛṇi]*, Bhāratīya Jñānapīṭha Publication Series No.36, 3rd ed. New Delhi: Bhāratīya Jñānapīṭha Publication, 1989, 1st. ed. in 1969.
- SAS *Sarvārthasiddhi* (Pūjyapāda): Pt. Phoolchandra Siddhant Shastri (ed.), *Sarvārthasiddhi of Pūjyapāda, The Commentary on Ācārya Griddhapiccha's Tattvārtha Sūtra*, Jñānapīṭha Mūrtidevi Granthamālā: Sanskrit Grantha No.13, New Delhi: Bhāratīya Jñānapīṭha Publication, 1971.
- SVin *Siddhiviniścaya* (Akalaṅka): Mahendra Kumār Śāstrī (ed.), *Siddhiviniścayaṭikā*. 2 Vols, Jñānapīṭha Mūrtidevi Jaina Granthamālā, Saṃskṛta Granthāṅka, 22 &23, Kashi: Bhāratīya Jñānapīṭha, 1959.
- TS *Tarkasaṅgraha* (Annambhaṭṭa): Y. V. Athalye (ed.), *Tarka-Saṅgraha of Annambhaṭṭa*, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1930.
- TRD *Tarkarahasyadīpikā* (Guṇaratna Sūri): See ṢDS.

宇野 惇

[1985] 「ジャイナ教認識論の一研究——「再認」pratyabhijñānaをめぐって」『雲井昭善博士古希記念仏教と異宗教』 p.243-256.

[1995] 「『ブラマーナ・ナヤ・タットヴァーローカ』——和訳と解説——(1)」『ジャイナ教研究』1, pp.2-23.

[1996] 『インド論理学』法蔵館、京都。

藤永 伸

[1990] 「ジャイナ教の認識過程」『印度学仏教学研究』第38巻第2号、p.(48)-(52)。

【註記】

* 本稿は、筑紫女学園大学・短期大学平成20年度特別研究助成費（一般研究）の交付を受けて開催され

た、宇野智行博士（筑紫女学園大学）との研究会の成果の一部である。また宇野博士からは草稿段階から多くの有益な助言を頂いた。記して謝意を表したい。

注

- 1) TAS 1.13: matiḥ smṛtiḥ saṃjñā ciptābhiniḥ bodha ity anarthāṃtaram //
- 2) Ratnaprabha on JTBh, p. 121, 3-5: atra vibhinnadeśakālasthitānāṃ ghaṭādivyaktināṃ sadṛśākārapariṇāma lakṣaṇaṃ ghaṭatvādisāmānyaṃ tiryaksāmānyaṃ, kuṇḍalakaṭākādīpūrcāparaparyāyānugāmisuvarṇādīdravyaṇ ca ūrdhvatāsāmānyaṃ iti vivekaḥ /
- 3) Ratnaprabha on JTBh, p. 121, 1-3: ādīpadāt sādṛśyavailakṣaṇyadūrattvasamīpatvaprāṃśutvahasvatrādisanīrūpakadharmānāṃ upagrahaḥ tena sādṛśyādigocaram api jñānaṃ pratyabhijñānaṃ ity arthaḥ /
- 4) 宇野 [1985]、藤永 [1995] 参照。
- 5) vivṛtti on LT3.10, p.404: avisamvādasmṛteḥ phalasya hetutvāt pramāṇaṃ dhāraṇā, smṛtiḥ saṃjñāyāḥ pratyavamarśasya, saṃjñā cintāyāḥ tarkasya, cintābhiniḥ bodhasyānumānadeḥ prak śabdayojanāt śeṣaṃ śrutajñānaṃ anekaprabhedam /
- 6) RA p. 8, 29-30: saṃkalanāṃ vivakṣitadharmayuktatvena vastunaḥ pratyavamarśanam ātmā svabhāvo yasyeti svarūpanirūpaṇam //
- 7) LT1.19: upamānaṃ prasiddhārthasādharmyāt sādhyasādhanam / tadvaidharmyāt pramāṇaṃ kiṃ syāt saṃjñīpratipādanam // (「もし」類比は、既知の対象との類似性に基づいて、未知のものを確立することである [、と君たちニヤーヤ学派はいうならば、それでは] その [既知の対象との] 相異性に基づいて、名称づけられるもの (saṃjñīn) を理解せしめるものはいかなるプラマーナか)
- 8) *Nyāyasūtra* における類比の定義は次の通りである。NS1.1.6: prasiddhasādharmyāt sādhyasādhanam upamānam /
- 9) このことについては藤永 [1990] も参照せよ。
- 10) 宇野 [1996 : 208] 参照。
- 11) 第三の認識に関して、宇野 [1985 : 244] によれば、古典ニヤーヤ学派では第一の認識の共同因であり、新ニヤーヤ学派では第二の認識よりもさらに直近の原因である。
- 12) アカランカが言及した「これは木である」という例に対する *Nyāyākumudacandra* の中では、「これは木である」という知が再認識であるとはプラパーチャンドラは明言していない。しかしプラパーチャンドラが、このような形の知を再認識とみなしていたことは次の引用から明らかである。See NKC p.65, 18: vṛkṣo 'yam ityādijñānānāṃ pratyabhijñānatvena vakṣyamāṇatvāt / (「これは木である」などといった知は再認識としてこれから述べられるだろうから)
- 13) PRM p. 136, fn.10: saṃjñīno vācyasya pratipādanāṃ vivakṣitasamjñāviśayatvena saṅkalanam / yathā vṛkṣo 'yam ityādi /

(かわじり ようへい：人間文化研究所 客員研究員)